



「アナーキズム。ク
ロポトキンはいつ
もエコロジカルに
ものを考えていま
したよ。」

私にとって先生
と呼べる人は、先
日亡くなられた都
留重人さん一人な
んですが、都留さんは、人間にとって悪
とは何か、これから始めることが大事な
んだと言いつつ、93歳で亡くなられるま
で一貫して水俣など公害問題を考え続け
ました。これは感動的ですね。

どうしたら人類を科学から救えるのか、
原爆の投下から60年、ゆっくりと考えて
来ての私の結論ですが、20世紀に入って
からの科学者は悪人だということです。
アラディの時代とは違って、インシ
ュタインもいい人だったんですが、
国家の目標と結びついてしまったために
やはり悪人になってしまいました。彼は
あとで、「今度生まれ変わったときは、鉛
管工になりたい」と言っています。

敗戦当時、阿南陸相の秘書官をして
いた林三郎——林達夫はその実弟ですが
——は、同級生だった桑原武夫さんに、
自分はこれからは無害な人間としてだけ
生きたいと言ったそうです。この考え方
を受け継ぐべきですね。

◎古代インド思想の教え◎

——鶴見さんは、老人とおっしゃりなが
ら、ご活躍を続け、私たちにいろいろな
ことを教え、伝えてくださっています。お
姉さんの鶴見和子さんのお仕事もすご
いですね。和子さんは、曼荼羅の思想を、
異なるものが異なるままに、お互いに補
いあい、助けあって、地球上に共生する
道を探ることだ、と要約され、「異なるも
のを排除し、抹殺することによって、単
一の文明をもって地球上を支配しようと
する一極支配主義は、核戦争と人類の滅
亡に至る道だと考える」と言われていま
す(『対話』の文化)。先ほど「文明に
とり残された老人」と逆説的な表現が出
ましたが、私などは、インド思想やイス
ラム文明などこれまで無知でした。西欧
近代主義文明と異なるこれらの文明への
接し方など、お聞かせくださいませんか。

鶴見 ピーター・ブルック監督による『マ
ハーバーラタ』という映画(88年)があり
ます。NHKでも一度放映されました。
オーストラリアのアドレニスでの祭りで
やった舞台を映画化したもので、6時間近
い長大な映画、その劇が終わるとき、ち
ょうど陽が上がるようになっていきます。

その一部に古代インドのヒンドゥー聖
典『バガヴァッド・ギーター』が含まれ
ています。神と人間が入り組んで、戦争
をやるんです。この語り手は、像の鼻を

した神で、また、戦争の神の役をやるの
は日本人俳優で、たしかヨシ筈田だっ
かと思うんですが、その神が悩んでいる
人間に向かつてこう言うのです。Can you
kill without anger? If then, victory is yours.
(怒りなしで戦えるか? それなら、お前の
勝ちだ)と。すばらしい言葉ですね。

ガンジーの思想もそうでした。彼はい
つでも絶対非暴力ではなかったのです。
息子が、もし暴漢が父に襲いかかったと
きでも、非暴力でなければいけないのか
と問うたとき、いや、それを止めるのに
力を使わざるを得なかったとしたら、使
ったらよい、そうでなければ人間ではな
い、と答えています。

でも、ガンジーも最初はこの『バガヴ
アッド・ギーター』を知らなかったのです。
イギリスに留学してから、H・D・ソロ
ーの思想などを通じて知ったのですね。
『バガヴァッド・ギーター』の英訳は、オ
ーデンと並ぶ詩人、クリストファー・イ
シャーによるもので、名訳ですよ。『マ
ハーバーラタ』の日本語訳も、長大なもの
ですが、もちろん出ています。

とにかく、こうしたインド思想、東洋
思想は、西欧文明とは異なる、私たちに
とっては新しい文明で、未来社会を考え
る場合に、大いに助けとなるものです。

(2006/06/15)

【聞き手・吉川勇一 写真撮影・大木晴子】

「怒りなしに戦えるなら勝つ」

——「文明」に対して人間を守ろう——

《インタビュー》鶴見 俊輔

——「九条の会」の全国交流集会（6月10日）に続けて「声なき声の会」の6・15集会と国会南通用門への献花行動…。お疲れのところをインタビューしました。「編集部」

◎改憲阻止の見通しは楽観的か◎

「九条の会」の集会には全国の九百以上の会から千五百人も参加者があつて盛会だったとのことですね。「九条の会」は地域や職場、あるいは分野別など、五千を超えたとか。呼びかけ人の皆さんの発言と報道されているものを拝見しますと、「九条の会は上り坂」「希望が持てる」というようなご発言が目につきます。改憲阻止の見通しについて、みなさんは楽観的な評価をされているのでしょうか。

鶴見 各地の九条の会の質はさまざまで、一律には言えませんが、現在、上り坂にあることは確かでしょう。でも、呼びかけ人が楽観的な見通しを持っているのかという点、必ずしもそうではありません。あの集會が終わったあと、呼びかけ人の集會があつたのですが、その席で、加藤周一さんは、改憲の国民投票で敗北したらどうするか、という問題を提起されました。5対4ぐらいの比率で負ける可能性だつてある、というんですね。その

時は、「九条の会セミナー」といったような行動を、呼びかけ人を中心に、何人かのゲストも加えて、いたるところで続けてゆくことを構想しているというんです。負けたからといって、それで終わりで決まらないんです。We are a minority, but a very large minority. (われわれは少数派だ、だが、とても大きな少数派なのだ)というわけです。イギリスの民主主義のなかでよく言われますが、4・5対5・5で負けても、その4・5をしつかりと固めてゆけばいいのだということです。決して安易な見通しを持っているわけではないのです。

——他の呼びかけ人のご意見は？

鶴見 そのときにいた大江、小田、澤地、奥平さん全員が、加藤さんの意見と提案に賛成でした。講演では、元氣の出るような発言もありましたが、楽観主義になつている人はいません。みなかなり厳しい見通しをもっています。

——鶴見さんは、この集會では、ご自分

のことを「文明にとり残されたもうろく老人」と言われて話をされましたね。

鶴見 ボケの話ですが、昔は、戦争中、いかにして人を殺さずに済ませるか、ということだけに必死でした。しかし、歳をとつて、死ぬのが近いというのは、元氣を与えてくれるんですよ。

九条の会の講演などで、名古屋、広島、大阪、松山：とずいぶん回りました。冬と夏は動きませんが、やれることはやるしかないと思つています。E・M・フォースターのような、ああいう粘り強い一貫した行動をするのが、私の目標です。大言壮語や、たくさんの人を集める集會は私は苦手なんです。そういうことを要求されるはイヤですね。それは前に来た道です。それではダメなんだ、と言いつけてもなかなか耳に入らないんです。

◎国家が減じた後の『風土記』の世界◎

今のようにだと、将来は滅びるのが当然だということになつてしまします。日本国家が減じれば、『風土記』の世界になります。そのとき浮上してくるのが、沖縄、広島、長崎で、沖縄はクニ、広島はクニ、長崎もクニになります。この『風土記』の世界では、高い山に登つて、そこから見える範囲がクニなんです。区役所程度のものがあつて、その連合がつくられるのです。未来の理想社会です。一種の